

# 東アジアの思想と構造

# 二眼の二郎神

二階堂 善 弘

## Two eyed Erlangshen

NIKAIDO Yoshihiro

Well known as three eyed God Erlangshen 二郎神, but who had only two eyes in Ming dynasty. There are no portrait of three eyed Erlangshen in Fengshen Bang 封神榜 and Xiyouji 西遊記. Perhaps this effect from another three eyes of God Huaguang 華光. And briefing of the Erwangmiao 二王廟 in Dujiangyan Sichuan.

キーワード：民間信仰、二郎神、二王廟、華光

### 前 言

二郎神は中華の地では知らぬ人はないと言えるほど、有名な神である。京劇などの演劇にもしばしば登場し、関帝・媽祖・八仙・玄天上帝・哪吒太子などと並ぶ知名度を誇る。『西遊記』や『封神演義』などの通俗文学作品の中でもひととき目立つ存在である。

二郎神については、当然ながらこれまで数多くの論考がある。黄芝崗氏の『中国的水神』、及び容肇祖氏の『二郎神考』は二郎神研究の初期の代表的な論著である<sup>1)</sup>。二郎神が李冰・趙昱・楊戩といった複数の人物に比定されることについては、すでにこの段階で指摘されている。その後も陸続と論著が出されたが、昨今は二郎神の由来について、仏教の毘沙門天の王子である独健との関連を論じるもの、また祇教との関係を論じるものなどがあり、やや議論が錯綜している感もある。

筆者は以前に二郎神の形象について、幾つかの神の変遷と共に検討したことがある<sup>2)</sup>。ただ、その時はあまり深く論じることができなかった。本論ではあらためて二郎神の形象の変容について取りあげ、かつ幾つかの説についてふれたい。また四川の二王廟などについて、その現状をふまえて報告することとする。

---

1) 黄芝崗『中国的水神』初版1934年生活書店、ここでは上海文芸出版社1988年再版を使用した。容肇祖『二郎神考』初版『民俗週刊』第61・62期合刊1930年、後に『中山大学民俗叢書』二巻に収録。

2) 「關於神明形象與『封神榜』之關係」(『2001海峽兩岸民間文学学術研討会論文集』花蓮師範学院民間文学研究所2001年) 195～205頁。

## 1. 二郎神の起源

二郎神の起源については、これまで様々な論議が行われてきた。古くは四川の李冰の信仰があり、そして後に趙昱や楊戩も二郎神と呼ばれた。この経緯については趙旭氏が簡潔にまとめているので、それに依拠したい<sup>3)</sup>。

二郎神に対する信仰は、四川地方を淵源とするものである。その中で最も有名であるのは、戦国期の蜀郡太守の李冰の次子李二郎と隋朝の趙昱、すなわち趙二郎であろう。李二郎は李冰の治水事業に協力し、その後民間において崇拝を受けることとなり、また後世朝廷などから絶えず封号を与えられることとなった。宋仁宗の嘉祐八年（1063）には「恵霊侯」に封ぜられ、宋徽宗の政和八年（1118）には改封して「昭慧顕霊真人」とした。元の至順元年（1330）には「英烈昭恵霊顕仁祐王」に封ぜられた。『西遊記』の第六回では、二郎神は孫悟空にこの称号を告げている。また趙昱の方は、かつて青城山において修仙し、その後嘉州の太守となった人物である。隋末に天下が乱れると、官位を捨てて去った。職にあったとき、趙昱は川に降りて害をなす蛟龍を斬ったことがある。後に川の水が溢れて水害となった時、趙昱はしばしば霊顕をあらわし、民間からの尊崇を受けるに至った。『三教搜神大全』の記事によれば、「民はその徳に感じ、廟を灌口に建ててこれを祀った。俗にこれを灌口二郎と称した」とある。北宋真宗の時期、趙昱を封じて「清源妙道真君」とした。元明の雑劇『二郎神醉射鎖魔鏡』『二郎神鎖齊天大聖』『灌口二郎斬健蛟』などの作品では、趙昱の活躍が見られる。さらに状況が複雑であるのが楊二郎である。ある研究者の指摘によれば、楊二郎の原型は南北朝時代の氏族の英雄である楊難当であるとする。（略）二郎神は手に三尖刀を持ち、細犬を従えている。加えて三眼であることは、氏族の影響を受けたものでないかと考えられるのである。もっとも『西遊記』第六回では孫悟空の口を借りて、「確か覚えているが、玉帝の妹が下界に降り、楊君と結ばれて子を産んだ。かつて斧で桃山を切り開いたというが、それがお前か」と言わせている。（略）『封神演義』では更に一歩進んで、明確に二郎神の名前を楊戩と記している。『西遊記』と『封神演義』の説話は民間に広く流布し、そのためか楊二郎の名が李二郎や趙二郎を圧倒することとなった。注意すべきことは、楊戩はもと北宋の徽宗に寵愛された宦官であり、蔡京・王黼・高俅・童貫・梁師成などと並んで「宣和六賊」の一員とされていることである。

この他、趙氏は許遜や鄧遐、さらに白族の二楞神の影響があるとも指摘する。実際に二郎神は幾つかの別個の人物や神が複合して形成された神格であると考えられる。ただ、現在では複合的な性格を強調しすぎて、やや議論が曖昧になっている面もある。さすがに白族や氏族の伝説の影響を考えるのは、少し行き過ぎた面がないだろうか。

もっとも、このうち李二郎・趙二郎・楊二郎の複合と変遷については、特に研究者間でも異論はないと考えられる。ただ「清源妙道真君」の称号は、本来は趙昱にのみ使われるものであったことについて

3) 『西遊記』中的二郎神形象芻議』（『沈陽教育学院学报』2010年3期）4～5頁。



二郎神像（四川都江堰二王廟）

は留意したい。

一方で于樹徳氏の「二郎神信仰的嬗変」などでは、二郎神は毘沙門天の次子である独健の変じたものであるとする<sup>4)</sup>。胡小偉氏が関帝を論じた『伽藍天尊』においても、関平と二郎神、それに独健の影響関係が論じられている<sup>5)</sup>。この独健と二郎神の関係は、かつて張政焯氏が主張されて以来、多くの研究者に受け入れられているようだ<sup>6)</sup>。例えば于樹徳氏は張政焯氏の説を承けて次のように述べる<sup>7)</sup>。

二郎神信仰が二郎独健崇拜に端を発していることは何によって明らかにできるのであろうか。まず第一に、二郎独健の記録が最も早いものであるということである。唐代以前においては、「二郎神」という記載はいかなる資料にも見えていない。ただ、唐崔令欽の『教坊記』の中に初めて「二郎神」の一語が見える。恐らくこれは当時仏教音楽が伝来した頃に、二郎独健の神跡を描写するため使われた曲名であると考えられる。第二には、二郎神という称号は二郎独健を源流とするものであるということである。仏曲の記載によれば、毘沙門天には五名の童子が従っているとされる。すなわち禅尼只、独健、那吒、鳩跋羅と甘露の五子である。これらの名称は非常に覚えにくく、その前に第二子であることを示す「二郎」を加えて次子であることを強調したものであると考えられる。これ

4) 于樹徳「二郎神信仰的嬗変」（『文史知識』1995年6期）75～79頁、及び于樹徳「也談二郎神信仰的嬗変」（『宗教学研究』四川大学道教与宗教文化研究所1996年2期）44～50頁。

5) 胡小偉『関公信仰研究系列』（科華図書出版公司2005年）所収。

6) 張政焯「『封神演義』漫談」（『世界宗教研究』1982年4期）56～62頁

7) 前掲于樹徳「也談二郎神信仰的嬗変」45頁。

は第三子の那吒を「三太子」と称したものと軌を一にするものである。しかしながら、このように始まった二郎独健の信仰は、その後は明確には表面には出てこなくなった。その原因を分析すると、恐らくその信仰が「輸入もの」であってなじみにくいものであったためと考えられる。毘沙門信仰の衰退と変遷を経て、二郎神信仰も土着化と変容が避けられなくなったのである。

独健が二郎神の淵源かどうかは、なかなか判断のしにくい問題である。なお毘沙門天の五太子については、最勝・独健・那吒・常見・禪式とする説もある。実際のところ、五太子といっても二子独健と三子那吒以外はあまり目立つ存在ではない。また別に四川地方の毘沙門天は、他地域とはやや異なる特色を有しているという指摘もある<sup>8)</sup>。

毘沙門天は後に李天王となり、これは四天王の多聞天とは別個の神とされた。さらに那吒太子は独自に信仰が発展し、中壇元帥哪吒三太子として盛んに信仰される存在となっている<sup>9)</sup>。この両神については、かなりその変遷については相対的に確認しやすい。しかし二郎独健については、ほとんど二郎神との関連が見いだせない。そもそも独健を「二郎」と呼んだかどうかは現段階では不明確である。そのため、筆者は現時点では「二郎神＝独健」説にはやや否定的に考えている。

また二郎神の起源について祇教由来であると主張するものもある。黎国韜氏の「二郎神之祇教来源」は、二郎神がゾロアスター教の神の影響を受けているとみなす<sup>10)</sup>。その根拠となるのは、『十国春秋』の次の記載である<sup>11)</sup>。

帝被金甲、冠珠帽、執戈矢而行。旌旗戈甲、連亘百余里不絶。百姓望之謂為「灌口祇神」。

ただこれが実際に「祇神」を指すものであるかは何とも言えない。興味深い説ではあるが、筆者としてはこの祇教起源説についても疑義を残しておきたい。

## 2. 二眼か三眼か

二郎神といえば、現在では三ツ目の神の代表的な存在と考えられている。いま二郎神を祀る廟のいずれを見ても、必ず二郎神像は三目に作るのを常とする。ただ、この形象は早期からのものではなかったと考える。

8) 大島幸代「四川地域の毘沙門天像-形式にみる四川の特徴について-」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第3分冊2010年) 99~115頁。

9) 詳しくは筆者「哪吒太子考」(『明清期における武神と神仙の発展』関西大学東西学術研究所研究叢刊29・関西大学出版部2009年) 5~39頁参照。

10) 黎国韜「二郎神之祇教来源-兼論二郎神何以成為戲神」(『宗教学研究』四川大学道教与宗教文化研究所2004年2期) 78~83頁。

11) 呉任臣『十国春秋』卷三十七蜀三。なお古典資料に関しては、関西大学アジア文化研究センター(CSAC)所蔵の『中国基本古籍庫』を使用して検索。

二郎神の形象について胡小偉氏は次のように述べる<sup>12)</sup>。

二郎独健及び趙昱、張仙はすべて髻のある姿で描かれている。しかしその後は白面の郎君に変じた。これは楊戩と二郎神との関係から容貌が変わっていったものと考えられる。

現在では、白面の青年の姿で、無髻であるものが標準的である。ただ、『西遊記』『封神演義』などの描写を見る限りでは、明代ではすでにその姿であったと考えられる。

二郎神はかつてむしろ二眼の姿が多かったのではないかということについて、筆者は以前に別個に論じたことがある<sup>13)</sup>。ここではそれを援用しながら再検討したい。まず『西遊記』については、第六回で二郎神について次のように描写する<sup>14)</sup>。

那真君的相貌、果是清奇、打扮得又秀氣。真箇是、儀容清儂貌堂堂、兩耳垂肩目有光。頭戴三山飛鳳帽、身穿一領淡鵝黃、縷金靴襯盤龍襪、玉帶團花八宝粧。腰跨彈弓新月樣、手執三尖兩刃槍。斧劈桃山曾救母、彈打櫻羅雙鳳凰。力誅八怪声名遠、義結梅山七聖行。心高不認天家眷、性傲歸神住灌江。赤城昭惠英靈聖、顯化無辺号二郎。

ただこの記載からのみでは、二眼か三眼かの区別はつかない。続いて『封神演義』であるが、実際には『封神演義』には聞仲・殷郊・呂岳など様々な三ツ目の人物が登場する。ところで『封神演義』第五十八回では、呂岳が登場する場面で、次のような記載が見える。

正義問、忽聞旗官報曰、有位三隻眼道人、請丞相答話。哪吒・楊戩在旁曰、今連戰五日、一日換一個、不知他營中有多少截教門人、師叔會他、便知端的。子牙伝令、擺隊伍出城、砲声響亮、兩扇門開、左右列興周滅紂英雄、前後立玉虛門下。且說呂岳見子牙出城、兵勢嚴整、果然比衆不同。

ここで不可解なのは、三眼の人物が現れたと聞いて、二郎神楊戩が訝っていることである。自身が三眼であったら、何故他の三ツ目の人物が現れた時にこのような反応になるのであろうか。

さらに当時の図像について見てみたい。ここで比較したいのは、元版『搜神広記』、明版『鍾伯敬批評封神演義』、明版『世徳堂西遊記』、明版『西遊記雜劇』における二郎神の姿である<sup>15)</sup>。

これらの挿絵について言えることは、当時の二郎神像は二眼の方がむしろ多いということである。そも

12) 前掲胡小偉『伽藍天尊』152頁。

13) 筆者「關於神明形象与『封神榜』之關係」（『2001海峡兩岸民間文学學術研討會論文集』花蓮師範學院民間文学研究所2001年）195～205頁。

14) 『李卓吾評本西遊記』（上海古籍出版社1994年）73頁。

15) 元版『搜神広記』は台湾学生書局の王秋桂・李豊楙編『中国民間信仰資料彙編』より、明版『鍾伯敬批評封神演義』は内閣文庫所蔵ものより、明版『世徳堂西遊記』と明版『西遊記雜劇』は遊子館の瀧本弘之編『中国古典文学挿画集成（二）西遊記』よりそれぞれ使用した。



元版『捜神広記』



明版『鍾伯敬批評封神演義』



明版『世徳堂本西遊記』



明版『西遊記雜劇』



明版『搜神記大全』

そもこの時期の二郎神は「三山帽」を着けているとされるが、それでは額の目が隠れてしまうことが多い。すなわち、元から明にかけての二郎神は、二眼の姿の方がむしろ常態であったのである。

さてそれでは明代までの二郎神は必ず二眼であったかということ、それに対する反証もある。例えば明版『搜神記大全』における二郎神の挿絵は、明らかに三目に描かれている<sup>16)</sup>。ただ、明末までにおける二郎神像は、やはり二眼の方がむしろ優勢なのではないかと考えられる。

そもそも中華の地では三眼の神は少なかった。蒼頡や方相氏などの神も、多くは四眼である。その後中国において三目の神が増えたのは、明らかに外来の宗教文化の影響である。

それが顕著に現れるのは宋代以降であり、恐らくは密教の多面多臂の神々の影響を受けたものと考えられる。

清代になると、二郎神はほぼ完全に三眼になっていく。清代の車王府本の『封神榜』においては、二郎神楊戩登場の場面は次のようになる<sup>17)</sup>。

在上主意請聽言、帥府外、有一道者要求見，特此前来稟一番。太公聞聽說有請、門官答應把身翻、不多一時来的快、道者跟隨在後辺。但見他、頭戴卧龍冠一頂、水合道袍身上穿。黄絨絲縑腰中縛、

16) 明版『搜神記大全』は前掲台湾学生書局の王秋桂・李豊楙編『中国民間信仰資料彙編』よりコピーを行った。

17) 蒙古車王府曲本『封神榜』（人民文学出版社1992年）1269頁。



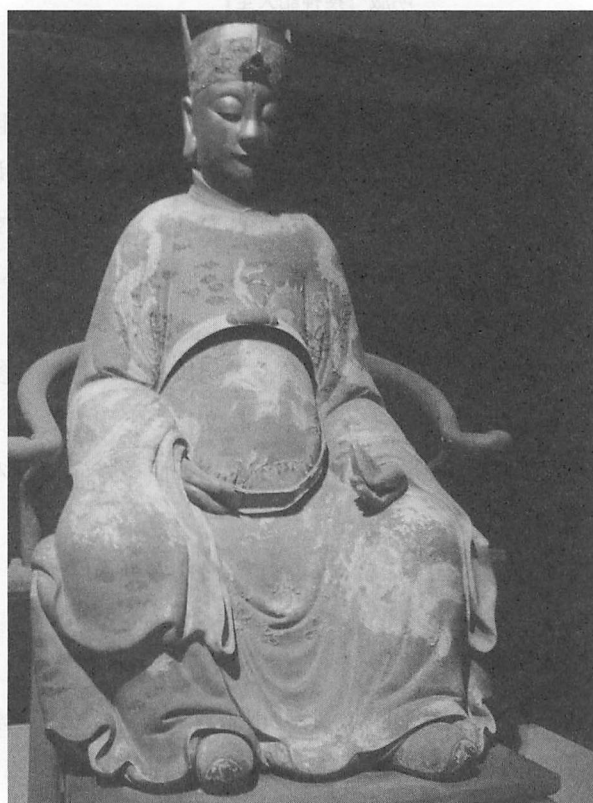
足登雲履顔色鮮。背後斜横雄龍劍、人品相貌正又端。面刀敷粉牙似玉、鼻梁高正似胆悬。立生一目三隻眼、額下風飄三絡髻。凜凜身材有一丈、仙風道骨不非凡。来到厅下打稽首、口尊、師叔請聽言、我本在、玉泉山上金霞洞、跟随着玉鼎真人道法伝。弟子楊戩奉師命、到此效力在軍前。家師不久臨凡界、来応劫数登循還。

ここでは完全に楊戩が「三隻眼」であることが強調されている。恐らく、明末から徐々に「三眼化」が進んでいったものと考えられる。

### 3. 華光神の影響

それでは何故二郎神が三眼になったのかと言えば、それはやはり他の神々の形象が影響したと考えられる。可能性の一つとして華光神の影響を考えてみたい。

華光神は、華光大帝、五顕霊官などと呼ばれ、密教の明王が変じて生じた神格である。火神であり、財神でもある。この神については、当初から三眼であり、それについては変化がない。華光については、筆者は別に詳しく論じたことがある<sup>18)</sup>。元から明にかけては江南を中心に非常に信仰が盛んであったが、



宇治萬福寺の華光像

18) 筆者『アジアの民間信仰と文化交渉』（関西大学出版部2012年）75～116頁。

その後衰えてしまった。現在では関東地域、広東地域で祀られているが、知る人の少ない神と化している。

宇治にある黄檗宗萬福寺に明末の華光大帝の像がある。この姿は、服装といい冠といい、先に挙げた明版『搜神記大全』の二郎神像と非常によく似た姿をしている。

華光神と二郎神については、これまでその影響関係について指摘していたのは、筆者以外はほとんど見られなかった。ところが、近年この両者の関係を論ずるものが出現してきている。

侯会氏は「華光・王靈官与二郎神」において、華光・王靈官・二郎神の共通点について探っている<sup>19)</sup>。

『南遊記』をみれば、書中の華光の形象と、民間神話伝説の二郎神に非常によく似たところがあるのは、かなり容易に見えてくる。まず、容貌の上から言っても華光と二郎神の間には三眼という似た特色がある。(略)次に、華光と二郎神が親類関係にあるということである。『南遊記』の第十六回にある記載では、(略)華光の師の火炎王光仏が来て、恐れる兩名に「そなたら二人は華光の来歴を知らぬのであろうが、華光は玉帝陛下の外甥に当たる。そなたらが陛下の前に出れば、陛下はお怒りになるであろう」と告げる。(略)民間伝説において、玉帝の外甥といえば、すなわち灌口二郎神のみである。(略)『南遊記』で数度にわたって華光は玉帝の外甥であると語るのは、すなわち華光神と二郎神が同一の関係であると示すものなのである。

この他、「母を救う」という故事が両者に共通するものであることも指摘する。実際に、華光神と二郎神の間には、大きな共通点が幾つも存在する。

一方で、相違点も少なからずある。まず華光は火神であり、二郎神は水神である。華光は白蛇や火鴉などの眷属があるが、二郎神は梅山兄弟や細犬を連れている。それに、先に見たように二郎神はそもそも三眼ではなかった。『西遊記雑劇』においても、両者は明確に別個の神として意識されている。

ただ、それでも形象面での影響はあったと考えたい。例えば哪吒太子であるが、現在は風火輪に乗る姿が一般的となっている。しかし本来風火輪に乗っていたのは華光神であった。『南遊記』を見ると、哪吒は白馬に乗っていたりする。これは清代になってから起こった変化である。特に華光神の信仰が衰えるに従って、その特色は様々な神へと受け継がれたものと想定される。二郎神は形象面で、華光神から三眼の姿など様々なものを引き継いだのではないだろうか。

#### 4. 二王廟と灯市口二郎廟跡

信仰の衰えてしまった華光神に比して、二郎神の現在の知名度は隔絶したものがある。恐らく中華の人々で、二郎神の名を知らぬ者はほとんどないと考えられる。

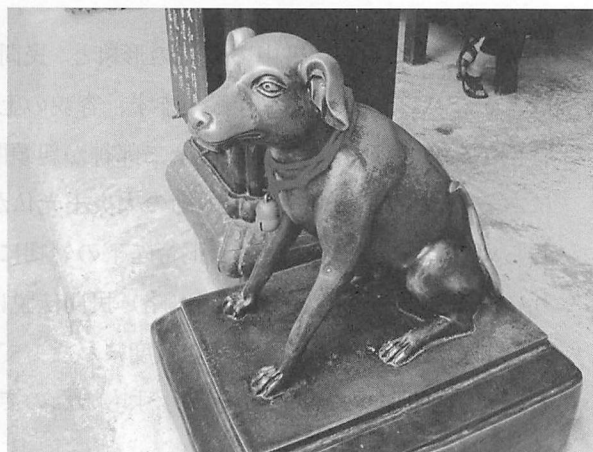
筆者もアジアの各地で二郎神が祭祀される状況を見てきた。ここでは四川都江堰の二王廟と、かつての北京灯市口にあった二郎廟についてふれたいと思う。

四川の都江堰では、いまでも李冰の行った治水事業が引き継がれている。そして李冰父子を祀った二

19) 侯会「華光・王靈官与二郎神」(『民俗研究』2009年2期)82~95頁。



二王廟入口



二王廟の哮天犬

王廟は、数多くの参拝客を集める観光地となっている。2008年5月には四川で大地震が起こり、二王廟も大きな被害を受けたが、現在ではかなり修復は終わっている。

筆者は2011年の夏に初めて四川の地に入り、峨眉山や青城山などの地の道観や廟について調査を行った。都江堰の二王廟もその時に調査を行ったものである。

二王廟は李冰とその子である二郎を祀る。父子共に王に封ぜられたことから、二王廟の名がある。ただ、李冰よりも祭祀の中心になっているのは李二郎である。

大殿と後殿に李冰父子を祀る。そして老君殿・三官殿・聖母殿などの建物が配されている。多くは清代の重建になるものである。入口の部分に王靈官を配するなど、ほぼ全真教道観の形式に倣っている。四川地区は現在全真教の影響が強いので、これは自然な現象であるかもしれない。

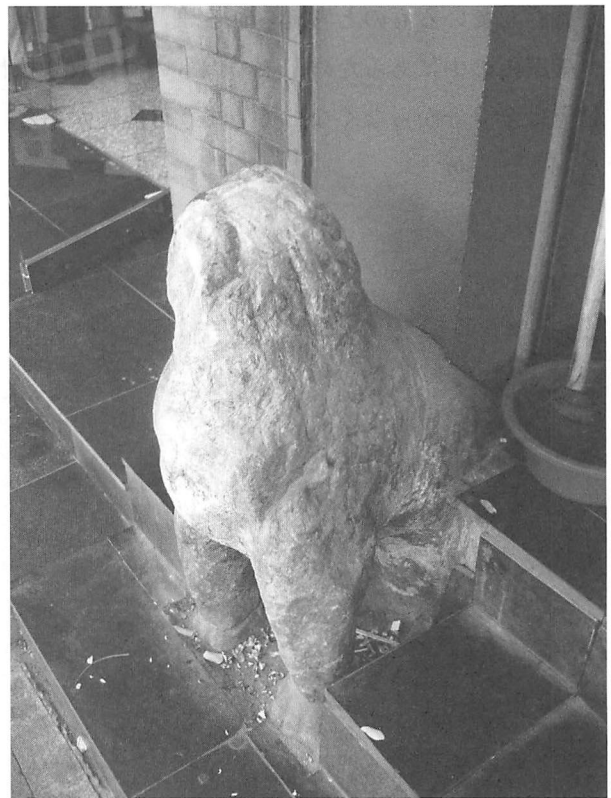
その称号は「清源妙道真君」李二郎となっている。しかしこれは本来、趙昱の有した号である。その点ではすでに李二郎と趙二郎は不可分の神格になっているといえよう。

二郎廟の特色として、犬を祀ることが挙げられる。二郎神の配下の犬は細犬、また哮天犬と呼ばれるもので、二郎神と必ずといってよいほど組み合わせるのが常になっている。

二王廟においても、李二郎の前に哮天犬が置かれていた。多くの人々が撫でるために、頭と背がまるで磨かれているようになっていた。

澤田瑞穂先生がかつて北京の二郎廟について書かれた「二つの二郎廟」という文章がある<sup>20)</sup>。これは戦

20) 澤田瑞穂「二つの二郎廟——信仰と環境——」(『中国の民間信仰』工作舎1982年) 64～67頁。



北京灯市口の石像

前まだ北京に残っていた二箇所二郎廟について書いたものである。一つは灯市口の小廟、そしてもう一つは永定門外の二郎廟である。戦争と文革を経て、両廟とも全く残っていない。当時の様子について澤田先生は次のように述べる<sup>21)</sup>。

北京には二郎廟とよばれる廟が二箇所ばかりある。最もよく知られているのは、東城灯市口東の二郎廟。現在でこそすっかり規模が縮小されて貧弱きわまる小祠となりはてているが、唐代からあるといわれるほどの古廟で、地の利を得ているせいか、月の朔望には参詣客ひきもきらず、ために線香なども狭い廟内に山と積まれて、景気はなかなか良さそうに見える。

この廟については、その跡地すら定かではなかった。ところが、いまの灯市口東の商店の間には、奇妙な半壊した石の像が置かれている。

その位置からして、これは恐らく灯市口二郎廟の哮天犬の石像であったのではないかと考えられる。澤田先生はこの石像には言及していないが、その内容から犬の像がどこかにあったとは考えられる。形状からして、これは犬であろう。文革の時期に破壊されたのであろうが、破壊しきれずにいま下の部分

21) 前掲澤田瑞穂「二つの二郎廟——信仰と環境——」64頁。

が残存しているものと考えられる<sup>22)</sup>。

繁華街の中にあるため、この像もいずれ取り払われてしまうのかもしれない。そうすると、二郎廟の位置は全く分からなくなってしまう可能性がある。ここで些か記録として残しておきたい。

---

22) なお、この像の調査と写真撮影については、慶應義塾大学経済学部の千田大介氏、関西大学文学研究科博士課程の二ノ宮聡氏のご助力を得た。お礼申し上げたい。